〝いざり〟PMD患児のための移動用ローラーシート

国立療養所下志津病院
整形外科　斉藤　篤
第6.7.8.病棟　宮沢栄子
山田小千代
西沢志津江

進行性筋ジストロフィー症児の運動機能障害はその進展に従い〝いざり移動〟に移行すると移動の能力は急激に低下する。当院入所中の〝いざり児〟はディルーム、自室、洗面所への移動が問題となる。私達は簡単な坐当て板を用いローラーにより摩擦を少くし、移動の補助になるローラーシートを試作した。

＜作製方法＞

約２０～３０cmの大きさの合板をサドル型、または円板状にけづり、そのほぼ中心に１２～１５cmの穴または、くぼみをつけ、その上にレザーかキャンバスを貼りつける。キャスターは前方にはユニバーサルのローラーを写真（１）のようにつける。後側方には両側に前後に滑走するローラーを用いる。平板と床面は低いほど安定するため、その高さは１～３cmとする。体重によるたわみも考えて決める。

＜使　用　法＞

〝いざり〟は主に側方または後方に向かって体幹の振り子状運動により、わずかの下肢筋を用いて坐骨面を床面より少し浮かして１０cm前後づつゆっくりと移動する。ローラーシートを用いると後方への移動は円滑になる。ローラーシートはその後面を傾けて、尻にさし込み、くぼみに坐骨面を入れて安定化させる。平板の前面のローラー上にあぐら状にして片方の下肢の足関節部をのせて、一方の利き足を用いる。膝を屈曲して立て、両手を用いて伸展させ、後方へ体幹の反動をつけるようにして殿部を移動させる。その逆方向前方移動も可能である。（写真２）

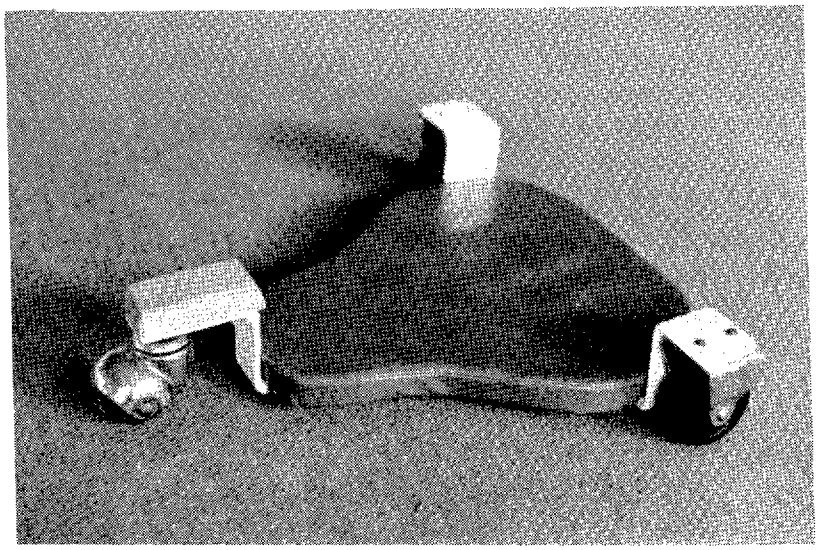
＜結　　果＞

側弯が高度であっても体幹のバランス感覚の良い患者は〝遊びとしてのローラーシート〟としても好んで使用する。特に後方への移動速度が増大する。欠点としては体幹の平衡が急激な滑動により失われ、転倒することがあり、不安定なため使用しない患児もある。

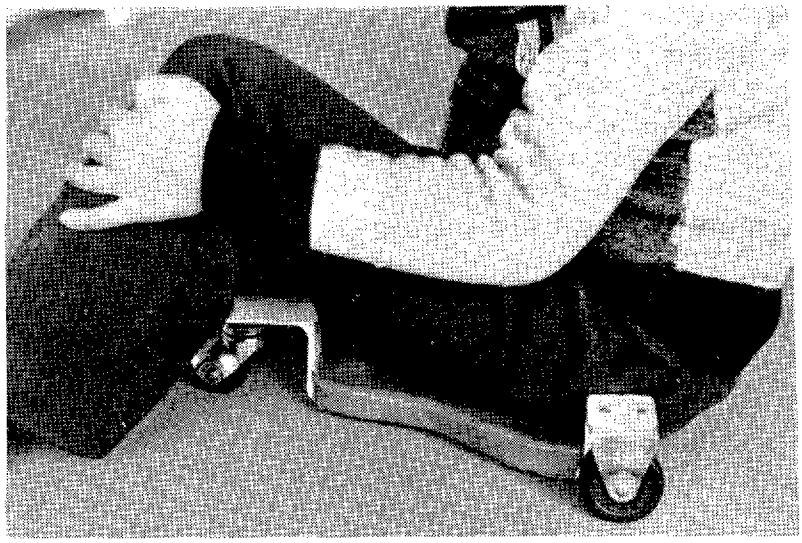
＜ま　と　め＞

施設用の移動法としてその行動範囲を拡大するためには、動く歩道または、廊下のようなものの開発や電動坐椅子のようなものが有効と考えられる。しかし、安価で有効なローラーシートの試作により平坦な廊下での移動が改善される。しかしバランス保持の問題など残されている。

(1)



(2)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

進行性筋ジストロフィー症児の運動機能障害はその進展に従い〝いざり移動〟に移行すると移動の能力は急、激に低下する。当院入所中の〝いざり児〟はディルーム、自室、洗面所への移動が問題となる。私達は簡単な坐当て板を用いローラーにより摩擦を少くし、移動の補助になるローラーシートを試作した。